カトリック
仙台教区報

1999年　1月20日　No.134
発行
カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
☎(022)222-7371 FAX(022)222-7378

仙台教区のクリスマス・新年

▲青森弘前教会ご降誕ミサ

青森

神様の恵みがいっぱい
改築中の弘前教会
五所川原教会の降誕祭

降誕祭を待ち望んだ私達は巡礼者として、心をひとつにして準備をしてきました。静けさの中での御ミサには心満たされました。また受洗されて私達の姉妹が誕生したすばらしい日でもありました。

御ミサの後、教会の前庭にろうそくのともされているコーヒーコーナーが設けられました。一杯のコーヒーを飲みながら、日曜日の御ミサに来られない方々や遠方から来た方々を囲んで輪がひろがりました。それはまるで馬小屋の前に巡礼者が希望を持って集まっているようでした。神様の恵みが満ちているようでした。

弘前教会は現在改築中です。明治十五年フォリー神父様が現在の土地を買い小さな聖堂を建て、明治四十三年に現在の教会が新築されました。聖堂の祭壇は、ゴシック様式のものでアムステルダムの聖トマス教会からコールス神父様が昭和十四年帰任の際、弘前にもたらされたものです。

今年の秋、弘前教会がテレビで放映された時、ガブリ神父様がステンドグラスの旧約聖書の言葉と新約聖書の場面を説明されました。私達の教会は見学者が多く、開かれた教会にしようと努力しています。

五所川原教会の降誕祭はベランジェ神父様と共に家族的に行われ、パーティーも楽しいお祝いのムードで盛り上がりました。

福島

会津地区では
「クリスマスの祈り」など
新企画を行う

会津若松教会では、十二月二十四日夜七時から今年初めての企画として、隣のザベリオ高校の生徒たちを対象にした「クリスマスの祈り」の集いを行い、キャンドルサービスやクリスマスキャロルを歌って、生徒たちにクリスマスの雰囲気を味わってもらいました。

八時半からは、ご降誕の深夜ミサが行われ、信徒・一般の市民を問わず、教会聖堂は満員でした。

また、カトリック教会も企画から加わって、十二月十二日「第三十四回クリスマス市民の集い'98IN喜多方」を、会津キリスト教連合主催で、多くの市民と共にキリストの誕生を祝いました。

新年のミサは、一月一日午前〇時からと午前九時三十分からささげられ、互いに新しい年を祝い、挨拶をかわしました。

喜多方教会では、新年のミサは午前〇時からと、午前十時から行われました。
　ドミニカン修道院では、十二月二十四日は、午後八時からのミサ、二十五日は午前十一時から行われました。
　田島教会では、二十五日午後二時からご降誕を祝うミサがささげられました。

▲会津若松教会　ご降誕ミサ中の洗礼式

「教会の信仰を顧み…」

教区管理者　鷹觜　達衛

　私たちの仙台教区は、去る六月に佐藤司教様が教区長を引退なさってからはや半年、司教座空位のまま、新しい年を迎えました。この間、私も教区内各県における信徒の集いに参加させていただきましたが、まさにミサの祈りの中の「私たちの罪ではなく、教会の信仰を顧み」という言葉の通り、私たちの教区においても生きた信仰が逞しく息づいていることを実感いたしました。このようにして信仰生活は、事情の如何にかかわらず、聖霊のお導きのもと、保たれて行くものと確信していますが、同時に、一日も早い新司教の着座を祈りたいと存じます。
　大聖年の準備も第三年目「御父の年」に入りました。この年を有益に送ることが、私たち信徒に与えられた大切な使命だと思います。教区民の皆様共々、典礼生活を通して、大聖年のお恵みに与ることを努めて参りましょう。

宮城

キリシタンの里　米川教会のクリスマス

　高台にある米川教会から、夜、町を見下ろしますと、家の窓からの光が点々と輝き、あたかも、イエス様が降誕されたベトレヘムの村を想わせます。
　米川教会では十二月二十四日、夜八時から、降誕祭を祝いました。ミサはキャンドルサービスで始め、祝賀会はビンゴゲーム等で参加者全員で楽しく過ごしました。

▲司祭信徒の入堂を待つ米川教会

　なお、毎年、元寺小路教会の信者有志が参加してくださる登米郡迫町にある東北新生園（ハンセン病国立病院）の降誕祭ミサは、二十五日、午前九時三十分から行いました。
　また、新年、元旦のミサは、新年の始めの時間を神様にお捧げするため、米川教会では午前〇時十分から、神の母聖マリアと世界平和のため、お祈りいたします。
　今年も「東和町・米川キリシタンの里まつり」を六月六日（日）午前十一時から殉教地「三経塚」で行います。
　当日、新幹線下り仙台駅発九時三分。くりこま高原駅着九時三十一分にマイクロバスでお迎えいたします。
　皆様、ご参加ください。

米川教会　高橋　昌　神父

『市民と共に祝うクリスマス』

約七百人出席

仙台・元寺小路教会

　元寺小路教会では、「市民と共に祝うクリスマス」のミサが十二月二十四日午後七時から、大聖堂で行われましたが、信徒のほか、信徒でない市民の方々で立垂の余地のない約七百人が出席して、盛大に行われました。
　まず、聖堂の照明が消され手に持ったローソクに火がつけられ、「しずけき」を全員で歌いミサが始まりました。
　第二朗読「総ての人々に救いをもたらす神の恵みが現れました。その恵みは私たちが不信心と現世的な欲望を捨てて、この世で、思慮深く、正しく、信心深く生活するように教え、また、祝福に満ちた希望、すなわち偉大なる神であり、私たちの救い主であるイエス・キリストの栄光の現われを待ち望むように教えています。……」（テトス2章11

節～14節）、福音朗読、説教があり、感動の一時間半が終わりました。
深夜ミサは、十一時から行われ、聖体奉仕者二十名の任命式がありました。
二十五日は午前九時三十分からミサがささげられました。
一九九九年元旦ミサは、午前十時から大聖堂で行い、午後二時からキリスト教連合の主催で、新年合同礼拝がプロテスタントの青葉荘教会で行われました。

▶仙台元寺小路教会「市民と共に祝うクリスマス」

岩手　一関教会のクリスマス
日本一と自負

一関教会のクリスマスは、聖堂の天井まで届く大きな樅の木の大木を山から切り出してきて祭壇に飾っていたのですが、飾り付けは、ドイツ方式で、無数のラメッタを枝に垂らし、その枝に本物のローソクを百本以上も灯すという誠にシンプルなものです。
しかし、きらきら光がゆらめくローソクの光でミサが捧げられましたが、それはそれは実に荘厳で、幻想的でもありました。
真っ暗な聖堂の馬ぶねの前に、ただ一個だけローソクが灯され、「しずけき」の聖歌が流れる中を真っ白な待者服の子供たちと神父様が入場し、樅の木のローソクに、ひとつまたひとつ灯されてゆきますと、聖堂は少しずつ明るく照らし出されていきました。
このような幻想的光景の中でのミサは、集まった人々に深い感銘を与えました。
樅の木は一本だけでなく、あるときは内陣に数本も飾るなど、まるで森の中でのミサのようなときもあり、信者たちは一関のクリスマスは日本一だと自負しています。
一関におけるこのようなクリスマスの風習は、ベトレヘム会の担当になった一九五〇年頃から始められ、六〇年頃になりますと、青年会員が二〇人位で山に行き、樅の木を切って来るようになり、それが固定化し、大型化して行ったようです。
しかし今は、諸般の事情により、毎年続いた風習をやめ、市販の樅の木を使用するようになりました。そのかわり、一関の光のページェントに合わせ、町の光に負けじと、聖堂からのイルミネーションを一段と増やし、クリスマスムードを盛り上げるようにしています。

▶一関教会
クリスマスの樅の木

青森　鮫教会のご降誕祭
元旦ミサ後記念撮影

十二月二十四日、午後六時冬至を過ぎたばかりのこの時期、あたりはすっかり暮れてしまい、ライトアップされた尖塔の十字架が象徴的な光景です。
〝静けき真夜中〟総勢七十名ほどの信徒の聖歌と共に待者が先導した司祭の入堂によりご降誕ミサが始まりました。
祭壇横にしつらえた馬小屋を祝別し、復活のローソクより採火された各自のローソクに次々に点火され、聖堂内は一層主のご降誕を祝う雰囲気が満ちております。
続いてミサに入り、救い主の誕生の意義とミサの中で行われる赤ちゃんの洗礼を祝う説教は、聞く者をして自分の誕生と受洗時の感激を再認識させました。
ミサ後、恒例の祝賀会は、婦人会の方々の奉仕により、ささやかながら、心のこもったサービスで、主のご降誕を祝うに充分なものであり、時間の経過と共に、益々参加者の意気は高まって行きました。

元旦のミサ

新年を迎え「神の聖母マリア」を讃えるミサが、一月一日午前十時、十字架を堅持した待者の先導により、司祭の入堂で始まりました。
帰省客を入れて総勢三十五名、大聖年を一年後に迎えるにふさわしい心の準備を誓い主の御国の益々の栄えあらんことを願って、声高らかに聖歌を唄い祈りました。
ミサの後、信徒館で恒例の新年の「あいさつ会」が行われ、信徒会長の発声による乾杯、そして来し方、行く末の語り合い、記念写真を撮り散会しました。

外国人女性たちの面倒を見る
二十四時間電話相談など
聖ウルスラ修道会塩町修道院

一九八〇年代のバブル経済期に八戸でも外国人労働者が急増し始めました。そのころ八戸塩町教会助任佐藤修神父がフィリピンの若い女性に会いそれをきっかけに聖ウルスラ会修道院に来るようになりました。

当初は数名ほどでしたが話を聞いている内、彼女たちは深刻な問題を抱えていることが分かりました。例えば、レイプされたとか、売春を強要された、妊娠中絶を強要された、暴力を受け心身ともに傷ついた人などすぐに何とかしなければならないケースばかりでした。一九八七年修道院にオープンハウスを開設し二十四時間電話による相談を受けつけることにしました。

このような活動には教会内外の多くの方々のご支援があります。

これまで相談に乗ったケースは数百件にのぼります。

この方々が来るときは「み言葉の祭儀」やミサで気持ちを落ち着かせ、終わると暖かい食事が振る舞われます。これらの祭儀のときはタガログ語の明るい歌声が響きいっとき辛いことを忘れるようです。

難しい問題の解決にはフィリピン大使館や移民局と連絡をとったり市役所との橋渡し病院への付添、医療費の負担通訳、衣服の提供、法律相談、暴力団や雇用者とのトラブルなど多岐にわたります。最近では、八戸漁港で働いていて不当な扱いを受けたり、解雇されたフィリピン人ヴェトナム人の漁船員も訪れます。彼らの相談に乗って市役所に訴えたり、場合によっては法的手段によって解決を図らなければなりません。

私たちはこれからも人が人として扱われるように、人権が守られ女性の地位向上のために働いて行きたいと思います。

（聖ウルスラ修道会
塩町修道院
シスター・メリー）

▲修道院で楽しく過す外国人の皆さん

フィリピンから
一関教会主任 土井勝吾神父へ感謝状

平成六年からフィリピンの小さな村で電気をともす運動を続けているボランティア組織「フィリピンの村に電気を贈る会」に西ミンドロ州知事から感謝状が届きました。贈る会の代表を務める一関教会主任司祭土井勝吾神父は「子供達が夜でも本を読めるようにさせたい」との声を聞いたのがきっかけでした。「カンパを寄せてくれた多くの人の努力で、自分達の出来ることをしてきたまで。現地の人達の喜んだ姿が最大の贈り物で、それを目に見える形で表してくれたのだろう。」と突然届いた感謝の証に目を細めていました。来年の二月には五ヵ所目の村となるインプロパーに電気をともす予定です。それに向けたカンパを土井神父が中心となり展開しています。

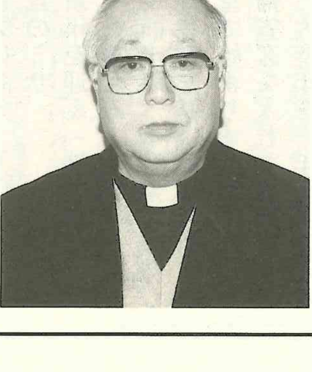
カンパの送り先は、郵便振替口座「02220－2－3704」フィリピンの村に電気を贈る会まで。問い合わせ0191（23）5431（幼稚園）の土井神父に。

▲感謝状を前にした土井神父

文部大臣表彰
野辺地教会主任 高瀬神父

野辺地教会主任司祭高瀬和夫神父が、十二月二十日教育者として、長年の功績により文部大臣表彰されました。高瀬神父は、幼稚園長として私学教育に三十八年以上携わり、混合クラスによる異年齢児の触れ合いの中から思いやりの心をはぐくんだ事由による。

その表彰については「東奥日報」に掲載されました。



大聖年準備について

◆◆◆ 各県・各地域からの報告 ◆◆◆

㈠ 岩手県盛岡から

⑴セルフ・エンカウンター開催される。

十一月二十七～二十九日の三日間、盛岡市山岸のシャルトル聖パウロ修道女会黙想の家で、フランシスコ会ダナン神父の指導により、セルフ・エンカウンターが行われました。

日常の重さから解き放たれて自己との出会いを求める四十四時間は、それぞれの参加者に新たな一歩を発見させてくれたようです。来年十一月の再会を約束してそれぞれの人生の場へと戻ってゆきました。

なお、夫婦のためのエンカウンター（マリッジ・エンカウンター　M・E）は四月二十三日～二十五日に、同じ黙想の家で行われます。指導司祭はダナン神父です。お問い合せは、岩手カトリックセンターまで。人数にワクがありますので、お早めにどうぞ。

⑵ 典礼音楽研修のお知らせ　新垣先生が講師

来る二月二十日㈯・二十一日㈰の両日、岩手カトリックセンター（盛岡市）において、典礼音楽の研修会が行われます。

テーマは『典礼の豊かさを求めて』。

講師は、新垣壬敏氏（白百合女子大教授）です。新垣氏は「ごらんよ空の鳥」「マラナタ」「キリストはぶどうの木」など典礼聖歌を数多く作曲されています。また、東京カトリック神学院の指導にも当たっておられます。

歌の魅力もさることながら、おおらかで暖かな人柄と豊かな感性は、指導されるひとりひとりの心を大きく解放し、歌う喜びを体験させてくれます。

研修は、第一部「歌はわたしたちの讃美のいけにえ－なぜ歌うのか－」、第二部「典礼の豊かさを求めて」、第三部「ミサの聖歌の歌い方」の三部構成。日程は、二十日㈯第一部十八時～二十時、二十一日㈰第二部十時～十二時、第三部十三時三十分～十五時。

カトリック教会の典礼関係者だけではなく、一般信徒、他宗派の方々にも広く参加を呼び掛け、エキュメニカルな研修会になっています。

カトリックセンターの収容人員のワクもありますので、参加希望の方は岩手カトリックセンター（盛岡市本町通二－一二－二五、TEL〇一九－六五四－〇五五七）までお問い合せください。

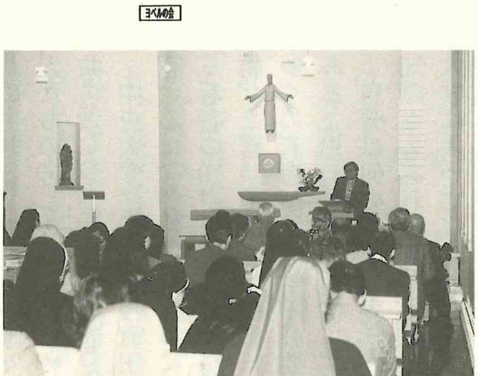
㈡ 宮城県仙台から

「ヨベルの会」が発足

一九九八年十月末の雨宮神父講演会『マグニフィカットのマリア』開催をきっかけに、その準備に関わった信徒・修道者・司祭有志が中心となって、十一月十九日ヨベルの会（「大聖年準備、祈りと学びの集い－第二バチカン公会議のこころ」実行委員会）が結成されました。教皇様が大聖年準備という挑戦には「教会と人類全体に対する神の特別な恩恵を確かに含んでいる」と約束されていることを受けて、「自分たちの手で、自分たちの責任で、肩書き抜きで行おう」を合い言葉に、この一年間（一九九八・一〇～一九九九・一二）のスケジュールが決定されました。

ヨベルの会では、第二バチカン公会議を振り返ることは、私たち自身と教会の将来に対する責任を担うことであり、これまでの受け身の姿勢を変えて、信徒・修道者・司祭が各自のできる範囲で、自分自身の問題として参加してほしいと呼び掛けています。さらに、これまでともすると仙台中心の催しが多かったことを反省し、会員からの希望があれば、宮城県内どこででも「祈りと学びの集い」を開催することになりました。

ヨベルの会



現在、同会では、十二月十三日カトリック新聞の記事にもありますように、雨宮神父講演会『マグニフィカットのマリア』の記録集と講話テープを作成し、頒布しています。これは、信徒・修道者・司祭の協力の一つの実りであり、ぜひ手元に置いていただき、「マリアの賛歌（マグニフィカット）」を通して働かれる、神の偉大な業に触れていただきたいと話しています。

① 記録集一〇〇〇円
② 講話テープ（一二〇分テープ三本一組）一五〇〇円
③ ①②セットで二〇〇〇円

いずれも送料込み。

申込先…千葉智行　TEL＆FAX
〇二二－二八六－二九九四

①は聖パウロ書院でも扱っています。また、十一月に②を求めた方には①を五〇〇円でお分けいたしますので、その旨申し出てください。

なお、同会では、今後の企画についても、講話テープ・記録集の頒布をはかりたいとしており、教区内外にその活用を呼び掛けています。問い合わせは、同・千葉まで。

【ヨベルの会　年間スケジュール】

第一回一九九八年十月二十九〜三十一日『マグニフィカットのマリア』雨宮慧神父（東京教区）、第二回一九九九年一月二四日『第二バチカン公会議を振り返って』、第三回二月二十日・二十一日『大聖年は、今』小田武彦神父（福音宣教室）、第四回三月二十日・二十一日『啓示憲章のこころ』奥村一郎神父（カルメル会）、第五回四月二十八日・二十九日『イスラエルと初代教会に見る神の民の姿』雨宮慧神父（東京教区）、第六回五月八日・九日『教会憲章のこころ』岩島忠彦神父（イエズス会）、第七回六月十二日・十三日『現代世界憲章のこころ』山田経三神父（イエズス会）、第八回八月二十一日・二十二日『神、いのち、人間』雨宮慧神父、第九回九月『現代世界とわたしたち1、いのちの今』、第十回十月『現代世界とわたしたち2、家庭の今』、第十一回十一月『典礼憲章の今』、第十二回『公会議後のマリア崇敬』

教区大聖年委員会では、教区内各地の大聖年準備の情報をお伝えしたい、また、各地で開催される催しもの相互の連携ができればと願っています。どうぞ皆さんの情報・要望をお寄せください。

世界宗教者平和会議

平和大学講座　仙台で開催

宗教の違いを超えて、平和のために取り組んでいる世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）は、毎年市民のために平和大学講座を開催しております。

▲パネルディスカッション

今年は初めて東北・仙台の斎藤報恩会館を会場に、「日本人の礼儀とマナー・隣人が見えないの？」というテーマで、四人の講師のパネルディスカッションが、十二月五日午後一時から四時三十分まで行われ、各教派から多数出席しました。

まず、国学院大学学長でこの日コーディネーター・基調発題を行った上田賢治氏は、「最近の日本では老いも若きも隣人を尊重する意識が欠けているので、礼儀を知らない、通勤途中のマナーも悪いのは当然である。せめて『他人には迷惑をかけないように』という教育でも徹底してほしいものだ。それに加えて、他人がしてほしいと思うことをしてあげるという教育も望まれる。」と発言。

東北福祉大学助教授畠山英子さんは、母親であり科学者の立場から、「家庭で食卓を囲み、家族の団らんが大切にされなくなった。食卓を囲みその場において、礼儀やマナーを植えつけなくてはならない。

それから、人間が生殖という自然の営みをしないで、人間が生まれる、クローン人間を作るといったこと。環境ホルモンの激変によって人間の生殖能力がおとろえている。これは生物に対する礼儀を欠いている。」

上智大学経済学部教授山田経三神父は、「日本人は、アジアの隣人が我々をどう見ているかを考えなければならない。

日本人は、経済的視点からアジアの隣国を見ようとするがこれでは友人になれない。日本と違う国々の違いを見つめ共に生きる。アジアの国々の人たちの苦しみを受けとめて共に苦しむ「共苦」が必要だ。」

中央大学法学部教授眞田芳憲さんは、「私のところに来る若者の10パーセントは精神病だと言ってよく、そのほか多くの若者が治療する必要があると思われる。

自分は何のために大学へ、知識さえあればよいと思って大学に入って来たという。現状を見ると、教育とは何なのか、はなはだ心もとない。これらの若者には隣人が見えない。人間としての生き方とは何かを問わなければならない。」

学習院大学名誉教授飯坂良明さんは、

「ルース・ベネディクトの『菊と力』（一九四一年）では日本人の心の構造を分析、日本人留学生の生き方を分析して、日本人はShame Culture（恥の文化）、人様に笑われるから、人様に恥をさらさないようにということが人の生き方の規範になっている。と言ったのである。これには、家があって社会がない。個人としてはよいが集団ではひどいことを行うことにつながる。」

ラ・サール・ホーム 開所五十周年記念

養護施設ラ・サール・ホームでは十一月五日関係者一五〇名とホームの子供と職員八五名が出席して、五十周年記念を行いました。同時に「照る日曇る日の子供たち」という写真誌も発行しました。

現在・ラサール・ホームは職員二十名で子供六十四名の世話をしています。もちろん色々困難な問題もありますが、職員一同、関係者方の指導や援助をもとに、子供たちがこの場所で自分が生きて行く意味と喜びを見つけていくことができるように努力されています。

▶「尊者デリア・テトロ」

無原罪の聖母宣教女会 創立者デリア・テトロ「尊者」に

◈記念ミサ行われる◈

郡山市でザベリオ学園を経営するなど世界各地で教育事業に携わっている無原罪の聖母宣教女会の創立者デリア・テトロ宣教女が、一九九七年十二月十八日に、「尊者」という栄誉ある地位に上げられ、これを記念して、十一月二十二日、郡山教会において神様への賛美と感謝のミサがささげられました。

無原罪の聖母宣教女会創立者デリア・テトロは、一八六五年カナダ・ケベック州マリービル村に生まれ、少女時代から宣教者の話しに強く動かされていた。一九〇二年デリアは、神に身を捧げて、理想を同じくする、仲間たちと共に、カナダ最初の女子宣教女会を創立した。

中国・広東に最初の宣教女を送って以来、日本をはじめ、フィリピン、ハイチ、アメリカ、キューバ等世界各地に宣教女が派遣され、会員数は八百名をかぞえ、国籍も十六ヵ国から成っている。

聖ウルスラ修道会 日本管区集会

十一月十四・十五の両日、聖ウルスラ修道会の日本管区集会が来日中のシスターノエラ・ゴドロ総長の出席のもとに、仙台・一本杉において開催され、出席者は約六十名でした。「聖霊に身を委ね、福音の新しい道を開いて行く」をテーマとしたこの集会のねらいは、九十五年の会の総会の指針にそって新しい福音化の視点を大切にしながら使徒職を見直すことにありました。

総長の基調講話は、聖ウルスラ会のカナダにおける創設者、福者マリード・レンカルナシオンの生誕四百年にちなみ、彼女の使徒的精神についてでした。この講話によって、シスターたちは彼女の使徒的精神が深い神体験から溢れ出ていることを確認しながら熱心に共同識別の一つのステップに参加しました。

仙台教区修道女連盟総会
十一月二十三日 仙台・教区センター

仙台教区修道女連盟の総会が、十一月二十三日、仙台司教区センターの小聖堂と二階会議室で開かれました。

午前中は、一九九七年にインドで行われた、アジア・オセアニア修道女会議（Asian Pacific meeting of Roligl-ous戦略ＡＭＯＲ）の報告、「環境と女性の相互依存について」がありました。

第十二回大会は、紀元二千年の八月八日広島市で行われることが発表されました。

午後は、仙台教区の修道院の院長会議が行われ、教区管理者鷹觜神父も出席し、短い話をされました。

フランシスコ・ザベリオ 島田神父の十三回忌のミサ

故フランシスコ・ザベリオ島田　實神父様十三回忌のミサが、十一月二十八日(土)午後四時から、島田　實神父様を偲ぶ会主催（代表者元寺小路教会早坂養吉さん）で行われ、約四百人が出席して在りし日の神父様の遺徳を偲びました。

島田神父様は、一九八六年十二月二十七日に帰天されました。

伝え続ける使命を確認

東北地区カトリック学校 理事長、校長研修会

東北地区カトリック学校連盟
会長　佐藤　大

東北地区カトリック小・中・高等学校連盟の理事長・校長研修会が、去る十一月二十七日・二十八の両日、仙台市で開催された。この連盟には東北六県と新潟県のカトリック学校が加盟しており、法人の数で十一、学校数では二十六の学校がある。教区で言うと仙台教区と新潟教区のすべてのカトリック学校ということになる。その連盟の校長会の歴史は古く、隔年ですでに十二回の研修会を行ってきたが、今回、理事長と校長が一緒に研修会を行ったことには理由がある。

本来カトリック学校はキリスト（教会）によってそれぞれの地域に派遣され、公教育を通して福音宣教の使命を果たすものである。従って、司牧的役割はカトリック学校といえども、教区長の指導の下にある。一方で多くのカトリック学校（当連盟では全部）は、宣教会によって設置、運営されているものであり、必ずしも教区との一体の仕事になっているとは言い難い部分も多い。加えて一九九七年二月に日本カトリック司教協議会の承認による「日本カトリック学校自己点検評価基準」が出され、日本のカトリック学校の「あるべき姿」について確認を得たところである。

さらに、少子化や不景気の中で、私学経営が困難さを増しており、また社会問題の複雑化と価値観のますます多様化する中で、カトリック学校の社会的使命をより明確にすることを求められている時期でもある。

そこで、このような時期に、カトリック学校を派遣している立場の教区長と、教育の実践推進者である理事長・校長とが席を同じくして話し合うことは、極めて意義の深いことを考え、実施したところである。あいにく仙台教区長現在空席なので、新潟教区長の佐藤敬一司教様と、仙台教区管理者の鷹觜達衛神父様のおふたりをお招きして、種々の課題について話し合いをし、ご指導をいただきました。最初の挨拶の中で鷹觜神父様にこれからのカトリック学校に期待することについてお話いただき、佐藤司教様から「カトリック学校の使命と歩み」と題する講演をいただいた。

各学校の校長からも課題やビジョンについての話題提起がなされ、最後に先の「自己点検評価基準」の中での教区と学校との関わりの今後について確認がなされた。多くの理事長の方々から、この会の意義の深さと今後の期待が表明され、教区と学校の協働について確認ができた。

教区本部から

大聖年委員会

大聖年当面の準備『第三年父である神』の年に入り、皆様のもとには司教協議会大聖年準備特別委員会委員長白柳枢機卿から「JUBILEE二〇〇〇・債務帳消し国際キャンペーン」署名・寄付依頼の文書が届いていることと存じます。旧約レビ記の「ヨベルの年」には由来するこのキャンペーンは、十字架のイエスこそ「ヨベルの年」の具現者である、と信じる私たちの信仰の根幹に触れるものです。

皆様の各小教区におかれましても、そこに署名用紙を備え置くだけでなく、一人一人が各自の生活の場で署名と寄付を集めてくださいますようにお願い申し上げます。

第一次締切は九九年一月三十一日、最終締切は三月二十日になっております。

なお、今回から教区大聖年委員会『大聖年ニュース』は教区報の中の一面を借りて掲載することになりました。

各地の取り組みについて、情報をお寄せください。

人権福祉委員会

教区報再刊第一号の点字文を各小教区宛に送付したところ、新たに三名の方が点字文と朗読テープを申し込まれました。今後も必要とする方の申込をお待ちしております。

さらに、教区内の点訳グループの発足をめざして、教区や関係者の方々と協力していきたいと思います。

また、一九九七年六月一日仙台で開かれた『障害の重荷を共に担える日をめざして』祈りと分かち合いの集い」のような催しを各県でも開催するために、準備を進めていきたいと思います。皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

ガブリエル 深澤豊治神父三回忌ミサ

ガブリエル深澤豊治神父様の三回忌の追悼ミサが、十二月三日午後二時から、元寺小路教会小聖堂で追悼文集発起人会（代表三浦平三神父）の主催で行われました。出席者に、「深澤豊治神父様追悼文集」が手渡されました。一九九六年十月二十三日帰天